

現代
語譯 日本古典文學全集

土佐日記・蜻蛉日記 紫式部日記・和泉式部日記

佐藤謙三・喜多義勇
松村博司・藤岡忠美



河出書房

現代語譯 日本古典文學全集

昭和二十九年六月十日
昭和二十九年六月十五日
初版印刷
初版發行



河出書房

譯者代表

佐藤 謙三

發行者

東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出 孝雄

印刷者

東京都文京區戶崎町七一
小泉 輝章

發行所 株式會社

河出書房

振替口座 東京一〇八〇二
電話東京(29)代表三七二一

土佐日記
蜻蛉日記
紫式部日記
和泉式部日記

定價 參百貳拾圓
地方價 參百參拾圓

印刷 小泉 ・ 製本 文勇堂

目次

土佐日記

解説

蜻蛉日記

凡例

上卷

はしがき

天曆八年

初夏の頃

秋

九月

十月—十二月

天曆九年

正月—八月

九月—十月

天曆十年

三月—五月

六月—冬

天徳元年

春

夏

七月—九月

十一月

天徳二・三・四年

應和元・二年

五月—六月

七月

應和三年

正月

康保元年

夏

秋

康保二年

秋—冬

康保三年

三月

四月—七月

八月

中卷

九月	九
康保四年	六
三月	六
五月	六
七月	七
十一月	七
十二月	七
安和元年	七
正月	七
三月	七
五月——七月	七
九月	七
安和二年	七
正月	七
三月——四月	八
五月	八
閏五月——六月	八
七月	八
八月——十二月	八
天祿元年	八
三月	八
四月——五月	九

下卷

六月	九
七月	九
八月——十二月	九
天祿二年	九
正月	九
二月——三月	九
四月	九
五月	九
六月	九
七月	九
八月	九
九月——十二月	九
天祿三年	九
正月	九
二月	九
閏二月	九
三月	九
四月	九
五月	九
六月	九
七月	九
八月	九

紫式部日記

九月	一〇
十月	一〇
十一月	一〇
十二月	一〇
天延元年	一〇
正月	一〇
二月	一〇
五月	一五
九月	一五
天延二年	一五
正月	一五
二月	一五

三月	一五
四月	一五
五月	一五
六月	一五
七月	一五
八月	一五
九月	一五
十月	一五
十一月	一五
十二月	一五
道綱母集	一五
解 説	一五

目 次

譯者のことば	二〇
一 初秋の土御門邸	二〇
二 女郎花	二〇
三 殿の三位の中將	二一
四 暮の負けわざ	二二
五 宿直の夜	二三
六 宰相の君	二三
七 菊の著せ綿	二四
八 御産所のしつらい	二五
九 御誕生記	二六

一〇 女房の服装	二二
一一 三日の産養	二三
一二 五日の産養	二三
一三 月夜の舟遊び	二六
一四 七日の産養	二六
一五 九月十八日	二七
一六 九日の産養	二八
一七 道長の祖父ぶり	二八
一八 中務の宮	二九
一九 水鳥を見て	三〇

二〇	小少將と和歌の贈答	三〇
二一	一條天皇土御門邸へ行幸	三〇
二二	十月十七日	三五
	若宮の御うぶぞり	三五
	若宮の職司定る	三五
	中宮大夫と中宮權亮	三五
二三	五十日の御祝	三六
二四	御冊子づくり	四〇
二五	若宮御成育	四〇
二六	里居と述懐	四一
二七	中宮内裏還啓	四二
二八	五節の舞姬	四四
二九	寅の日	四六
三〇	童女御覽	四六
三一	賀茂臨時祭の奉幣使	四九
三二	新參の思ひ出	五〇

和泉式部日記

はじめに	一九一
四月十餘日	一九三
四月三十日	一九八
五月五日	二〇一
七月七日	二〇九

三三	つごもりの夜のひきはぎ	二五一
三四	正月三日の御戴餅その他	二五二
	御戴餅	二五三
	女房の批評	二五三
	齋院と中宮御所	二五五
	和泉式部その他の批評	二五八
	心境、閱歴	二五九
三五	御堂もうでその他	二六五
	御堂もうでと舟遊び	二六五
	道長と和歌の贈答	二六六
三六	若宮達の御戴餅とお薬の儀	二六八
三七	中宮の臨時客	二六九
三八	中務の命婦	二七〇
三九	二宮の五十日の御祝	二七〇
解説		二七四
和泉式部日記系圖		二七七

七月末日	二二〇
八月某日	二二一
八月末日	二二三
九月二十餘日	二二四
九月末日	二二七

十月十日	三二八
十一月一日	三三三
十二月十八日	三三七
一月一日	三三九
解 說	三四三

土佐日記



男も書くとかいう日記という物を、女もためしにやってみようという次第で書くわけなのである。

或年の十二月二十一日の夜八時頃に門出した。その事情を少しばかり物に書き付ける。

或人が、その國守の任期四年、五年が終つて、例の事務引繼など皆完了し、その證明書など受け取つて、住んでいた官舎から出て、船に乗る所へ移る。あの人、この人、知る人、知らぬ人が、見送りする。年來仲よく一緒にやって來た人々は、特別に別れがたく思つて、其日一日しきりにとやかくして騒ぐうちに夜がふけてしまった。

註

1 承平四年（九三四）。

2 紀貫之。土佐守。延長八年（九三〇）に赴任。國守の任期は四年が原則であつた。

3 大津。

二十二日に、和泉國までとたいらかに行けるよう願を立てる。藤原のときざねが、船路なのだが馬のはなむけをする。上中下の人々が酔いすぎて、とても妙なことに、潮海のほとりであざれあつた。

註

1 陸の旅の門出に行なうのが「うまのはなむけ」なのに、それを船の旅にするのがおかしいとたわむれたのである。「うまのはなむけ」は餞別の意であるが、普通その意味を、旅行く人の乗つて行く馬の鼻を行先の方へ向けてやるのだと説いている。ここともその意味にして船路に馬は變だと言っているのだらう。「うま」の原義は多分「うまし」の方であらう。

2 「あざる」に二つの意味があるのを、たくみに使つた技巧である。一つは魚肉などのくさる意、一つはたわむれる意。「鹽」に「くさる」は矛盾しているのに意。

二十三日。八木のやすのりという人がある。この人は國の役所でいつも用を言いつけるときまわつていた従者でもない。それでいてこの人が、立派な形式でお餞別をしたものだ。主の國守の人格、手腕の故であらうか。一體に地方の人の心の常として、このような場合、今はもう用もないというのか、姿も見えないものなのを、やすのりのように心ある人は、他人のおもわくに氣がねもせずによつて來た。これは何も品物によつてほめるといふわけでもない。

二十四日。講師が、御別れの挨拶をしにおいでになつた。その場にいた人全部、上下、子供までが酔いしれて、一文をさえ知らぬ者が、足の方は十文字にふんで遊ぶさわ

ぎ。

註

四分寺の僧官で、地方の僧尼の首長。

二十五日。新任の國守の館から呼びに手紙を持って人が來た。呼ばれて行つて、一晝夜というもの、とやかくと遊ぶような工合で夜が明けてしまった。

二十六日。相變らず國守の館で、もてなしに大きわざして、郎等に至るまでに贈物をあてがった。唐詩を、聲をあけて吟じた。和歌を、主人も客も其他の人も吟じ合つたものだ。唐詩の方はこの女の日記には書けない。和歌、主人の國守のよんだのは、

都いでて君に會はんと來しものを來しかひもなく別れぬるかな

とあつたので、歸る前の守のよんだのは、

白妙の波路を遠く行きかひて我に似べきは誰ならなくに

其他の人々のもあつたが、よいものないようだ。あれこれと言つて、前の守も今の守も一緒に庭に下りて、今の守である主人も、前の守の客も、手を取りかわして、酔ったまぎれの言葉で氣持よさそうな話をして、一方は出て行き、一方は家にはいった。

註

1 都を出てあなたに會おうと來た、そのかいもなくはや別れてしまうことか、名残おしい。

2 波路はるかに都とことと御互に行きちがつて別れるわけだが、結局つらかつた私の境涯に似てつらい思いをするのは、誰でもない、行きちがい來たあなただ。無事でおられるよう祈ります。

二十七日。大津から浦戸をさして漕ぎ出る。こうしていううちに、京都で生れた女の子が、この國でにわかになくなつたので、このごろの出發の支度を見るけれど、悲しみのあまり、何事も言わずにいる。京都へ歸るにつけても、その女の子の今はないということだけを、悲しみもし戀しくも思う。いあわせる人々もその悲しみにたえない。この間に、或人の書いて出した歌、

都へと思ふをものの悲しきは歸らぬ人のあればなりけり

又、或時には、

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらととふぞ悲しかりける

と言っている間に、鹿兒の崎という所に、守の兄弟、又他の人、これかれが酒など持つて後を追つて來て、磯に下

りて席をもうけ、別れのつらい事をいう。守の館の人々の中で、このやって来た人々が、物の心得もある人という風に言われていて、そのそぶりがちりと見えるのだ（自他相許すという所）。こうして、別れがつらいと言つて、その人々が、朽網も皆で持てば使えるというわけで、この海邊で皆してかつぎ出した合作の歌、

をしと思ふ人やとまると葦鴨のうち群れてこそ我は來にけれ

と言つていたので、とてもとてもそれをほめて、行く人のよんだ歌、

棹させどそこひも知らぬわたつみの深き心を君にみるかな

と言う間に、舟の梶取は物のあわれも知らないで、自分十分酒をくらったのだからさつさとしてしまおうとして、「潮がみちた。風もきつと吹くだらう」とさわぐので、舟にのつてしまおうとする。この折に、其場にいる人々が、折節につけて唐詩をあまた、其時に似つかわしいのを吟じる。又或人は、ここは西國なのだが、東の國の甲斐歌などを詠じる。このように歌うので、人々は「舟屋形にまつた塵も散り、空行く雲もとまつて浮いている」と言つてほめることだ。今宵は浦戸に泊る。藤原のときさね、橘のすえひら、其他の人々が後を追つて來た。

註

1 都へ歸るのだと思うとうれしいはずのものを、逆に悲しいというわけは、歸らぬ人があるからだつた。歸らぬ人は亡き人にかけて言う。

2 もはや亡き人であるのを、しばしば忘れ忘れて、あるものと思ひ、その子はどこだとたずねるのが、我ながら悲しいことよ。

3 名残おしいと思う人がもしとどまることもあるかと、我々はうち群れて來たのだ。「をし」は「惜し」に「をし鳥」にかけてあり、又鳥の名の「あしがも」を「群る」の序にしている。

4 棹をさして計つても底も分らぬ海のように情深い心を、あなたの中に見出したことだ。

5 古今集卷二十の大歌所の歌の中に東歌の一群があるが、其中に甲斐歌、陸奥歌など見える。「かひがねをさやにも見しかけられなくよこをり伏せるさやの中山」はその一例。別に「風俗」の歌謡の中にも甲斐歌がある。

6 塵と雲と二つとも音楽の名手に關する古代中國の書物に見える故事により、特に前者は梁塵の梁を舟の屋形に言い代えたのである。事文類聚續集「善歌者有虞公、發聲動三梁上塵」。列子、湯問篇「秦青……撫

節悲歌、聲振三林木、響過三行雲。」

二十八日。浦戸から漕ぎ出て大湊を目ざす。この間に、ずっと昔の國守の子山口のちみねが、酒と上等の食物などを持って來て舟に入れた。舟で行きながら、道中で飲み且つ食べる。

二十九日。大湊に泊った。國の役所の醫師が、わざわざ、屋敷、白敷に酒をそえて持って來た。特別の厚意があるように見える。

註

此年の十二月は小の月で、此日が晦日になる。それで元日に用いる藥を醫者が届けてくれた。

元日。相變らず同じ泊りである。白敷の包みを或者がほんの一夜の間だというので、舟屋形にさし挿んでおいたので、風が吹きつけ吹きつけして海に吹き入られて、飲めなくなりました。其他正月用のずいきも、あらめも、齒がためもない。このような物のない國なのだ。探し求めてもおかない。正月の物としてはただ押鮎の口だけを吸う。この吸う人々の口を押鮎の方で或いは何か思う子細もあるうか。今日は、都のことばかりが思いやられてしかたがない。「あの小家の門のしめ繩についているなよしの頭や、ひいらぎなど、どんなだろう」と話し合っている。

註

1 正月の祝の食物。餅、大根、焼鳥、押鮎などを用いた。

2 押鮎は土佐の名産、宮廷にも献上した。その食べ方に、まず魚の口を吸う方法があったものか。

二日。やはり大湊に泊った。講師が食物、酒を届けてくれた。

三日。同じ所である。こう舟の動けないのは、ことによつたら風と波とが、私たちをいましばらくと惜む氣持があるのだろうか、何ともおぼつかない。

四日。風が吹くので立つことができない。まさつらが、酒と上等の食物とを献上した。この、こんな工合に物を持って來る人に、ただ知らん顔もしておれず、さりとてちょっとしたお禮をさせる物もない。人の出入などにぎやかなうだけれど、何かひけめを感じる。

五日。風波がやまないの、まだ同じ所にいる。人々がたえずみまいに來る。

六日。昨日のごとし。

七日になった。同じ港にいる。今日は宮廷の白馬の節會を思いやるが、そのかいもない。白い馬のかわりにただ波の白いのだけが見える。こうしている間に、知人の家が池

という名のついている所にある、そこから、その名に似あわず鯉はなくて、鮒から初めて川の魚も海の魚も、他の品物なども、長櫃ながびに入れて幾つもかつぎ續けてよこした。其中にある若菜わかしなが、今日は七日だということをば知らせている。歌がついている、その歌、

浅茅生の野べにしあれば水もなき池につみつる若菜なりけり＊

大變おもしろい。この歌の池というのは所の名である。

京の貴族の娘が夫に従って下って来て住んだ所である。この長櫃ながびの物は舟の全員、子供にまでくれたから、満ちたりて、舟子ふねこどもは腹はら鼓つづみを打って、海をまでおどろかして、舟には禁物の波を立てそうだ。こうして、この間に多くの事があった。

今日、破籠わろうを持たせて来た人、その名を何と言ったか、其中に思ひ出そう。此人がみまいに来たのは、初めから歌をよもうと思ふ心があつての事であつた。あれこれと話しに話して、さて「この浪の立つことはどうです。」と歎き言つてよんだ歌、

行く先に立つ白波の聲よりもおくれ泣かん我やまさらん＊

とよんだものだ。とても大聲なのだろう。持参した物に比べては歌はどうかなという所。この歌をこの人あの人と

感心するけれど、一人も返しをしない。當然できる人もその場にまじっているのだけれど、この歌だけを感服推奨して、物ばかり食べて、夜がふけてしまった。この歌主は「まだお暇やすみはしませんから。」と言つてその場を立つた。或人の子に當るまだ子供なのが、そつと言ふことには、「私、この歌のかえしをしよう。」と言ふ。驚いて「とてもおもしろい事だね。うまくよみおせるかね。よめるなら、早く言いなさい。」と言ふ。「まだお暇はしませんと言つて立つて行つた人を待つてよもう。」と言つて探したところが、夜がふけたというわけであるうか、座を立つたまま舟から歸つてしまつていた。「そもそもどんな風によんだのか。」と不思議がつて聞く。この子はさすがに恥じて言わない。強いて聞くので口ずさんだ歌、

行く人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそぬれまさりけれ＊

とよんだわけだ。子供でいてこんなにもよむものか。子供がかわいいいせいで感心するのであろうか、とても意外なことだ。折角の出来の歌を子供わざにしておいては何もならない。いっそおじいさんおばあさんの作にでもした方がよい。この歌が悪くもあれ、いかにもあれ、よいついでがあればあの人に送つてやろうというので、そのまましまつておかれたようだ。

註

1 正月七日、宮廷で馬寮の馬を見る行事。白い馬を見

て年中の邪氣をはらうと言われる。白馬と誓いて「あ
おうま」とよむしきたりである。

2 當地は池とは名だけで水もない野原ですので、池で
つんだ若菜という珍しい物をごらんに入れる次第で
す。

3 中にしきりのある木製の箱。ここはその中に色々の
御馳走をつめた贈物。重詰じゅうづめをたくさん用意して來たの
である。

4 はげしく立つ波の音よりも、名残を惜しむ私の泣聲
の方が高いでしようの意だが、舟で行く人々に波の立
つは禁句である。

5 行く人も送る人も共に涙の川をなしているの、水
ぎわはますますぬれまさることだ。「涙川」も「みぎ
はまさる」も涙の流れるのを意味する歌の用語である。

八日。さしさわりがあつて、やはり同じ所である。今宵、
月は海にはいる。これを見て、業平の君の「山のはにげて
入れずもあらなん」という歌うたが思われる。もし海邊うみべでよん
だならば、「波立ちさへて入れずもあらなん」とでもよん
だであらうか。今、この歌を思い出して、或人のよんだの

は、

照る月の流るゝ見れば天の川いづるみなとは海にざり
けるま
とか。

註

1 古今集、雜上、上句「あかなくにまだきも月のかく
るゝか」。伊勢物語參照。

2 月の流れて行く方角を見ると、天の川の流れ出るみ
なと（河口）は、やはり地上の川と同じ海だったのだ。
九日の早朝、大湊から奈半なはんの泊を目ざそうと漕ぎ出し
た。これかれと互いに國の境の内だけはこの川で送り
に來る人が多數ある中で、藤原のときさね、橘のすえひ
ら、長谷部はせべのゆきまさ等が、守の御館みたちから出發なされた日
以來ここかしこと後を追って來る。この人々こそ厚意のあ
る人だった。この人々の深い厚意は、この海にもおとらな
いだろう。

ここから今度こそは漕ぎはなれて行く。これを見送らう
とて、この人々は追って來たのだ。さて漕いで行くまに、
海のとりにとどまった人も遠くなった。舟の人も見えな
くなった。岸にも言うことがあるだろう。舟にも思うこと
があるけれど、しかたがない。こんな状態だったが、この

歌を獨言にしてすませた。

おもひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずや
あるらん*

さて、宇多の松原を行き過ぎる。その松の数がいくつあるのか、幾千年たったのかも分らない。本ごとに波がうちよせ、枝ごとに鶴が飛びかよう。おもしろいと見ているだけでは氣がすまずに、舟人のよんだ歌、

見わたせば松の末ごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふ
べらなる*

とか。この歌は實際の所を見ると、それにはまさり得ない。この有様を見ながら漕いで行くに従って、山も海も皆暮れ、夜がふけて、西東も見えないで、天氣のことは梶取の心二つにまかせてしまった。男子でも舟路になれないのはとても心細い。まして女子は舟底に頭をつきあてて聲をあげて泣くばかり。皆がこんな風に思っているのに、舟子、梶取は舟歌を歌って何とも思っていない。その歌う歌は、

春の野にてぞ音をば泣く。若すゝきに手切るくつんだる菜を、親やまぼるらん、しうとめや食ふらん。かへらや。

よんべのうなゐもがな。錢乞はん。そらごとをして、おぎのりわざをして、錢も持て來ず、己だに來ず。これだけでなく、多いけれども書かない。これらを人が

笑うのを聞いて、海は荒れるけれども、心は少しないだ。このようにして行き暮して、泊について、おじいさん一人、おばあさん一人が、一行の中で氣持わるがって物も食べなさらずに、ひそひそと寝てしまった。

註

1 岸の人々に思いをよせる、その心だけは海を渡るのだが、かんじんの文(踏み、ふんで行くの意がかかる)がないから知らずにいるだろう。

2 見渡すと松の梢ごとに鶴がすんでいるが、その鶴は松を千代にも及ぶ仲間と思つていようだ。

3 春の野でしくしく泣いている。若すすきで手を切り切りして摘んだ菜を、親がたべるだろう、あの姑が食うだろう。「かへらや」は、歌のはやしことばだが、全然無意味ではなく、後出の歌謠にも使われ「歸らや」の意味を幾分持つていると見える。「かえらや節」とでも名附ける一群の歌謠を考えてよい。此歌、若い嫁が夫に食べさせたい菜を、親即ちしゅうとめが食べることかと歎いた氣持の歌。

次は又別の歌。昨夜の子供が来てくれればいいが。錢を催促してやろう。うそをついて、品物を借りて行って、錢も持つて來ず、自分さえ來ない。子供はおそら